

〔「画僧古磔」展によせて〕

明誉古磔について—近世絵画史における重要性—

明誉古磔(1653~1717)は、江戸時代前半に奈良・京都を中心に活躍した画僧です。現存作例も奈良・京都の社寺を中心に所蔵されますが、その生涯や出生地については詳らかではありません。まとまった作品が伝わる薬師寺には古磔の位牌が祀られ、生涯を知る重要な手がかりです。表面には「證蓮社明誉上人古磔虚舟大和尚」、裏面には「釈古磔、前任洛陽報恩寺、次住郡山西岸寺、後閑居於地藏院(略)住凡三年、其間檢薬師経意自画大曼荼羅一幅、及因薬師寺縁起四軸(略)享保二年酉五月廿三日寂、寿六十五歳」と記されます。

会期中の5月23日(火)に没後300年を迎え、位牌に記された「薬師浄土曼荼羅」一幅(図1)、「薬師寺縁起絵巻」四巻は現存しており、展示に出陳されます。薬師寺の他にゆかりの寺院として挙げられた西岸寺は、徳川四天王の一人として著名な戦国武将、本多忠勝の子孫が創建に関わったとされ、大和郡山の有力な寺院の一つでした。残念ながら明和八年頃(1771)には既に退転していたようですが、隣接したと推定されるのが光伝寺です。こちらには古磔の「涅槃図」(図2)が伝われます。一方、京都の報恩寺は、古磔が十五代の住持を勤めた寺院です。寺宝には、豊臣秀吉が気に入って聚楽第に持ち帰り、床にか

けたところ、夜半に咆哮し秀吉を驚かせたという逸話のある、明代の「鳴虎図」が知られています。報恩寺からは、「当麻曼荼羅図」(図3)が出陳されます。

古磔の代名詞ともいえる作品は、『古画備考』に「多く大黒を写す」とある、愛らしく親しみやすい雰囲気の大黒天です(図4)。様々な動きを伴う点に特色があります。近年行われた薬師寺の文書調査によって、古磔が二千枚を超える大黒天を寄進したことが明らかにされています。一方仏画では、泉涌寺に所蔵される「大涅槃図」が有名です。縦16メートル、横8メートルの大きさがあり、現存する国内最大の涅槃図です。3月15日の涅槃会法要に合わせて公開される際には、仏殿の内陣いっばいを使って天井から床にコの字に懸けられ圧倒されます。古磔の作品は、大黒天のような俳画風の水墨画や、大画面に描かれた涅槃図や曼荼羅の他、社寺縁起絵巻、祖师像、さらには版本の挿図もあり、幅広い画風が注目されます。

古磔の生きた時代には、琳派を大成した尾形光琳(1658~1716)がいます。しかし、著名な光琳に比べ、古磔の名を知る人は多くはありません。近世前半期の画僧の研究は十分になされていないのが現状です。主な先行研究は、鈴木進「画僧古磔と人物草画」(『画説』14,1938年)

及び、マニー・ヒックマン「古磔研究(1)画僧明誉古磔の概要」「古磔研究(2)画僧明誉古磔の作風」「古磔研究(3)画僧明誉古磔の研究課題」(『美術フォーラム21』20,21,22,2009、2010年)で、主要な作例の紹介がなされていますが、今回の展示会を通じて、近世絵画研究に新たな視点、切り口が得られるものと期待されます。

一点目は、古磔その人の生涯と画風展開を具体的にみる事が出来る点です。年紀のある作品や、版本の場合は刊行年、あるいは実際の出来事をもとに描いた作例からは、制作年代を推定することが可能です。奈良・京都に住み、「地元」の絵画需要に積極的に応えた古磔の作例は、近世前半期の画僧の絵画制作の実態を知ることが出来る重要な手がかりです。

二点目は、浄土宗の僧侶による絵画制作の様相を知ることが出来る点です。江戸時代の禅僧の絵画活動については、黄檗宗の隠元(1592~1673)、逸然(1601~1668)、臨済宗の白隠(1685~1768)、仙厓(1750~1837)についての研究が盛んにされ、展示も開催されてきました。古磔は浄土宗の僧侶であり、「無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀経」という浄土三部経に基づいた仏画を制作しています。同じ画題を描く中世に制作された仏画との比較を通じ、近世の浄土教絵画はどのような特徴を持つのか、分析が可能となります。一方、水墨画に着目すると、白隠、仙厓の描く禅画には、形にとらわれない自由で大胆な構図、親しみやすい画

風が認められますが、同様の画趣は古磔の水墨画にも見られます。

三点目は、古磔の手がけた木版挿図の挿図が注目されます。刊行年の最も早い例として『当麻曼荼羅白記撮要』『浄土十六祖伝』(1688年)が挙げられます。その他、浄土宗の教義や祖师に関わる内容の版本挿図を手がけており、それぞれの内容や図様に着目することで、出版文化と画僧、寺院との関わりを知る手がかりとなります。

以上のように、幅広い作画活動を行った古磔の作品から、江戸時代前半の絵画史を彩る重要な人物の一人として評価することが出来ます。古磔は京都と奈良を主な活動拠点としましたが、同時代の京都では、尾形光琳や浮世絵師の西川祐信(1671~1750)が活躍していました。さらに、奈良を拠点としたことは注目されます。上方に比べ、画家の具体的な活動や文化的なネットワークの実態は不明な点が多く、古磔を基軸として奈良という「場」を切り口とした視点で捉えることも大切ではないでしょうか。

古磔の作品が一堂に会える展示会は、大和郡山の永慶寺において1927年と1958年に数日間開催されたほか、1997年と2012年に薬師寺で所蔵作品を中心に公開されました。本格的な展示会は今回が初めてです。この機会に、画僧古磔の多彩な画技とその魅力に触れて頂けたら幸いです。(古川攝一)



図1 (部分図)



図2 (部分図)

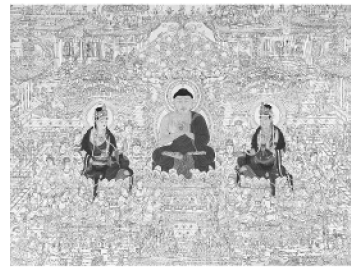


図3 (部分図)



図4

季刊 美のたより No.198

平成29年 4月 8日

発行 大和文華館